



〒663-8558 西宮市池開町 6-46  
武庫川女子大学 言語文化研究所  
ilc@mukogawa-u.ac.jp  
Tel : 0798-45-3536  
Fax : 0798-45-3574

## コロナが変えた SNS

——大学生の LINE 使用は新型コロナウイルスでどう変わったか——

2019 年 11 月に発生した新型コロナウイルスは、私たちの日常生活に大きな影響を与えました。国内初の感染者は、2020 年 1 月 16 日に確認され、またたく間にその数を増やしていったことは周知のとおりです。日常生活では外出自粛が求められ、また、各種学校では休校措置や遠隔授業が取り入れられるなど、大変な混乱の中で 1 年が経とうとしています。今までは、他人と対面（＝オフライン）で築いてきたコミュニケーションの方法は、さまざまな場面でオンライン化せざるを得ない状況です。このような中では、人と人とのつながり方、連絡の取り方にも何らかの変化が起こっているはずです。

このレポートでは、SNS の中でも特に LINE の使い方に焦点を当て、新型コロナウイルス発生以前と以後とで、大学生のやり取りの状況はどのような点が変わったか、その実態について報告をします。

### 1. 調査概要

調査対象者 ・「SNS から日本語を見る」2020 年度前期受講者 102 名<sup>1</sup>  
・「レポート作成の基礎」2020 年度前期受講者 63 名<sup>2</sup> 計 165 名

調査方法（教員からの指示）：

日常的に利用している SNS について、内容、頻度、やり取りの相手、使う場面などについて、新型コロナウイルス発生以前と以後とでどのように変化しているかを内省してまとめることとする。対象とするのは、学生自身のデータでも、友人や家族から得たデータでもかまわないとした。

<sup>1</sup> 本学の共通教育科目。2020 年度前期は Google Meet による遠隔授業。

<sup>2</sup> 阪南大学の授業。2020 年度前期は Microsoft Teams による遠隔授業。

## 2. 調査結果

### 2.1 相手の変化 「疎」だった人とのやり取りが〔増加〕

《発 生 前》

- ・いつも決まった相手
- ・部活の同期やクラスの友達
- ・学外の友人
- ・家族

《発 生 後》

- ・連絡を取っていなかった人から連絡が来るようになる
- ・部活の先輩や後輩、中学時代や高校時代の友達
- ・同じクラスのかかわりが少なかった友人と会話をする機会が増加
- ・1年に1回程度、半年に1回程度しか連絡を取らなかった友人
- ・今までつながりがなかったクラスメイト
- ・バイト先の人たち

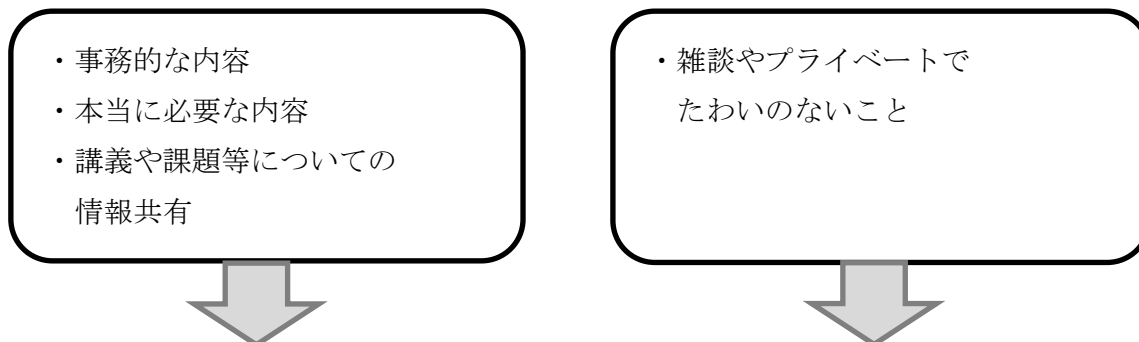
発生後には、発生前までは疎遠だった人や、頻繁に連絡を取り合う間柄ではなかった人と連絡を取り合うようになる変化が確認された。発生前は「親」な関係とのやり取りが多かったところに、発生後は「疎」の関係が加わったということである。

災害や事故など非日常的なことが起こると、知人の安否が気になり、連絡を取って確認しようとするのが一般的な行動であろう。このコロナ禍の中でも同様のことが行われていることがうかがえる。人と人との縁を改めてつなぎなおす機会になったということだ。

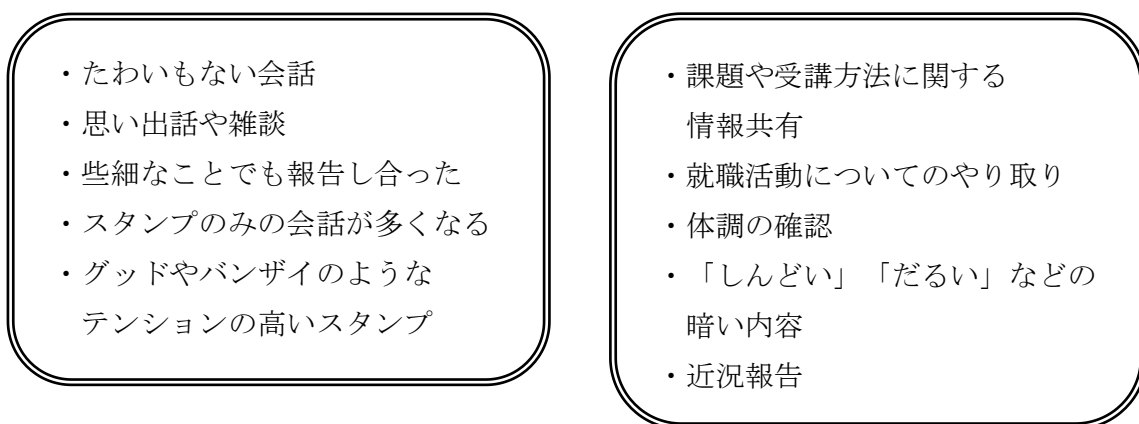
ただし、同じ「親」の関係であっても、相手が「家族」か「友人」かで、やり取り回数の増減傾向が異なる。「家族」に対しては、発生後の LINE 回数がかかなり減少したという回答が多く、他方、「大学の友人」とのやり取りについては増加したという回答が多く見られた。これは、コロナ発生時の外出自粛と関係する。外出がままならないということは、必然的に自宅で過ごす時間が増えることである。つまり、家族との対面時間が増える。これにより、家族とは LINE での連絡の必要性が低くなるが、対面できない友人とは直接に話ができず LINE の使用が多くなるということである。

## 2.2 内容の変化 課題などの情報共有 ⇔ たわいもない会話

《発生前》



《発生後》



やり取りの内容については、大きく2つの変化が確認される。1つは、授業の課題についてなど、学校生活を送る上で必要となる情報を共有するためのやり取りから、些細な出来事やたわいもない内容に変化したというものだ。コロナ発生前にできていたオフラインでの“おしゃべり”が、発生後にオンライン上へとスライドしたということだろう。

2つ目はこの逆で、単なる“おしゃべり”から受講方法などの情報共有に変わったというものだ。これはオンライン授業が開始されることに関連している。オンライン授業のための準備に関する情報量はかなり多い上に、ほとんどの学生にとって初めての体験である。学生は、大学から発信されるこれらの情報を大学のプラットフォームから得て、自分で対応しなければならない。そのような中で、間違っていないだろうかとか、これでいいのだろうかという不安感や焦燥感が、学生たちの意識としてあったことは容易に想像できる。それらを解消するために欠かせないのが、友人との情報交換であったのだろう。「些細なことでも報告し合った」という文言からは、その不安の大きさがどれほどであったのかをうかがい知ることができる。

そのほか、「近況報告」は、「疎」だった人とのやり取りがあったことと関連するものであり、そこでは「体調」を尋ねるやり取りも当然含まれるものだろう。

## 2.3 頻度、間隔、機能の変化 回数が増え返信時間が短縮、文字から音声へ

《発生前》

- ・ 1日1回程度のやり取り
- ・ 予定がある時だけ連絡
- ・ 返信までに3、4日かかる
- ・ トークのみ

《発生後》

- ・ やり取り回数、使用時間が増加した
- ・ すぐに既読がつき返信が早くなる
- ・ LINE 電話を頻繁にするようになる

次に、LINE をやり取りする回数、間隔、選択される LINE 機能の変化を確認しよう。学生全体の傾向として、やり取りの回数・使用時間は増加し、既読と返信をするまでの時間が短縮されている。回数や使用時間が増えたのは、自宅にいてスマホを操作する時間が必然的に増えたことも大きく関係していると言える。また、トークのやり取りだけだったものから、LINE 電話を使用するという変化がある。これは、機器（スマホ）の面から言えば、備わっている機能の中で何を使用するかということであり、コミュニケーションの種類の選択という点から見れば、文字から音声への変化である。コロナの発生によって、書き言葉（打ち言葉）から話し言葉への変化があったということだ。新年度に行われる種々の手続きや履修登録などは、通常であってもややこしい。オフラインであれば、友人と相談しながら進められるが、それができない状況の中で、より適切で確実なコミュニケーションとして電話で話すことを選択したと言える。その理由として次のことが考えられる。まずは、同時性である。発生前はトークでも問題なかったのだろうが（というよりも、むしろ同時性が敬遠されていたのだろう）、いくら返信までの時間が短縮されたとはいえ、LINE でのやり取りは文字入力が必要となるため、相手に届くまでにどうしてもタイムラグが生じる。同時性の点から言えば、トークよりも電話の方が的確で有利なことは間違いない。また、対面が制限される中で相手の状況・様子を知るには、声の調子は大きなヒントになる。コロナの中での不安感、焦燥感、恐怖感などが電話を選択するという行動をとらせたのだと考えられる。

作成にあたり佐竹秀雄先生からご助言をいただきました。記して感謝いたします。

担当：岸本 千秋 作業協力者：向井 弥生